

## エッセー

# 全カリ英語を振り返って

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室／  
異文化コミュニケーション学部教授 鳥飼 慎一郎

私は1996年の4月に立教に着任して今年で23年目を迎え、65歳ということで世間で言うところの定年となった。これまで多くの方が定年で辞めていく姿を見てきたが、今度は自分の番であるのに、いまだにまだその実感が湧いてこない。おそらく、23年間立教大学の全カリ英語をやるのが日常的な行為となり、その意識がいまだに強いからであろう。

私が立教に着任した1996年は新しい全カリ英語教育が始まるちょうど1年前である。私は全カリ英語を担うための教員の第1期生として採用された。このことは私の立教での23年間に大変強く影響を与えることになった。私は専門と言うほどのことではないが、英語のカリキュラムに強い関心を持ち、自分で新たな英語カリキュラムを作り、それを大学で実施することを望んできた。立教の面接の時にも、自分がやりたいカリキュラムを作り持参して、面接員全員に配り、立教に採用された暁にはこのカリキュラムをやってみたいと言ったことを覚えている。それまで2つの大学に専任として勤めていたが、どうも自分が考える英語のカリキュラムとは違う面ばかりが気になり、いつかは自分の手で大学の英語のカリキュラムを作って実施してみたいと考えていたからである。面接を終え、帰宅する地下鉄の中で、ある種の達成感とさすがしさを感じたことを今でもよく覚えている。

その後、何カ月かたったある晩、確か11時くらいだったと思うが、電話がかかってきた。こんなに夜遅く何の電話だろうと思いつつ受話器を取ると、堰を切ったような勢いで「構想小委員会で承認されたので、次は運営委員会での承認を…」と極めて強いエネルギーを感じる声が聞こえてきた。その背後では多くの人の喧噪にも似たやり取りが部屋中に響き渡っていたのをよく覚えている。こんなに夜遅くまでいったいこの大学は何をやっているのだらうと感じたものである。その後いくつかの会議体で承認され、立教で採用されることになった。3月であろうか、寺崎先生という立派な教授がわざわざ挨拶をしに姫路までやって来てくれた。

立教に移ると、私は全カリという組織に属し、研究室員と呼ばれることになった。やたらと夜遅い会議が多く、着任早々幾つもの英語科目のコーディネーターを任せられ、いきなりコミュニカティブというコースのパイロットクラスを担当するようと言われ、面食らったものである。次から次へと新しい英語科目のシラバスを書き、一緒に着任した外国人教員とプレースメントテストを作り、翌年の4月に実施した。英語自由選択科目という2年次以降の英語カリキュラムを作れというので、これまで温めていた英語

科目を多く取り入れたカリキュラムを作った。これを実施してよいかと聞くと、ろくに見もせずにあっさり「よい」という。あまりにもあっさり言われたので、その後2回も本当に良いのかと聞くと、そのたびに「よい」という返事が返ってきた。責任というよりも、怖さすら感じたものである。私はそれまで大学の成績の付け方に強い疑問を感じており、立教に行ったら是非とも統一試験を実施して、どの教員のクラスを履修しようとも同じ尺度で評価されるシステムを構築すべきだと考えていたので、立教でも早速それを実施したいと申し出ると、「ハイどうぞ」という答えがこれもあっさりと返ってきた。その後、毎学期末に1年次生のおよそ3分の2を対象としたリーディングとリスニングの統一テストを作っては実施し、その結果を各担当教員に送る責任者を務めた。今考えるとよくやったものである。

強く印象に残っているのは統一教科書作りである。立教独自の自分たちの英語教育をやるのだから、自分たちで理想とする英語教科書を作るべきだということになり、ビデオを使った速読教材を何人かの教員とともに作った。その当時、英語の速読に興味を持ち授業中に取り入れてはいたものの、本当に学生は速読をしているのか疑問に感じていた。教科書の単語をバラバラに読むのではなく、ある程度の意味のまとまりごとに区切り、それをひとまとめにして読む、そのまとまりの中のキーワードに焦点を当て、それ以外の箇所はサッと流し、リズム感を持って読むと早く読むことができる、と授業中にいくら言っても実際に学生がどう読んでいるのかは定かでない。ということで、アイスパンに入る程度の単語のまとまりをビデオ画面でハイライトし、その音読の速さに合わせてそのハイライトの部分を移動してゆく、どの程度の語数をまとめて読み込めばいいのか、どの単語に焦点を絞って読み進めればよいのかがビジュアル的に示され、それに合わせて読んでいけば速読の練習ができるようにした。日本人学習者の英文の読み方を分析するために、心理学科の教員がアイカメラを持っているというのでそれをぜひ使わせて欲しいと頼み込み、学生を被験者にして英文読解時の視線の解析も行った。ビデオ教材を作るに当たっては、製作会社のスタジオに足繁く通い、ハイライトの箇所を細かく指示したものである。これもまた、若気の至りと言おうか、今考えるとよくやったものである。

私が立教に着任する前年に、固定式の机ではいくら英語の授業をコミュニケーションにやろうとしても無理である、机やイスも移動ができる物にしようということが急遽決まり、一斉に替えたと聞いている。当時は「全カリまかり通る」とまで言われたのだそうである。しかしながら、このような全カリ英語教育の隆盛もそう長くは続くものではなかった。その頃よく言われたのが、「全学が支える教養教育」ということである。それまでの立教は一般教育部という組織があり、学生は立教に入学すると全員、一般教育部に所属し、一般教育課程を修了した後にそれぞれの専門学部にも所属したのだという。その後、一般教育課程と専門教育課程が並行して学生を教育する形に変わり、専門学部に入学者を一般教育部も同時に教育するようになったのだという。ところが1991年に大学設置基準の大綱化が行われ、大学が独自に教育内容を自由に決めてよいという

ことになると、多くの大学にあった一般教育部が次々と廃止された。英語もそれまではどの大学でも8単位必修であったものが自由に単位数を決められるということになり、英語の単位数を減らす大学、選択科目化する大学が続出し、大学の英語教員は大騒ぎになった。立教も一時は英語教育を外注化する案も取り沙汰されたが、一部の若い教員たちが、自分たちが全力で支えるので、立教独自の革新的なカリキュラムを作り、それを強化発展させて欲しいと当時の塚田総長を説き伏せて外注を免れたのだと聞いた。一般教育部解体後に発足した大学教育研究部に在籍していた英語の教員は1998年より各専門学部に分属することとなり、その学部の専任教員として在籍し、全学の英語教育を行うという体制ができあがったのである。「全学が支える教養教育」というのもその流れから出てきた考え方である。

この「全学が支える教養教育」という考え方は、各専門学部が支えようと強く意識し、積極的に行動している限りにおいてはうまく機能するのであるが、そのような機運が薄れると、潮が引くように熱気が冷めてゆくのもまた事実であった。大学の教員にとってまずは自分の専門を確立しそれを高めることが重要であり、自分が属する専門学部の運営が優先されるものである。一時あった各学部の全学の教養教育への熱気が冷めてゆくのも、自然の流れであったのかもしれない。専門学部に分属していた一部の教員たちの間にも変化が起こった。学部を持たない独立大学院を作ろうという動きである。その結果、2002年に異文化コミュニケーション研究科が開設された。全カリが発足して僅か6年後のことである。専門学部に移籍する英語教員も現れた。大学側でも新たな動きが出てきた。それまで8単位必修であった英語の単位が6単位になったのである。日本において英語は外国語であり、日常的に使用する機会はほとんどない。英語の授業は数少ない貴重な英語使用の機会である。それが減少することは厳しいものであった。更に、2008年には各学部に分属していた教員が再結集して、異文化コミュニケーション学部を開設した。2012年には異文化コミュニケーション学部の上に異文化コミュニケーション研究科言語科学専攻が開設された。2020年からは、これまで全カリの英語教育を担ってきた教員は全カリ英語教育の運営から撤退し、それに代わる新たな組織「外国語教育研究センター」が開設されることになっている。全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室発足から24年後のことである。全カリ英語を担ってきた教員たちは異文化コミュニケーション学部これまで以上に専念し、新たに構築される組織が全カリ英語を担ってゆくことになる。歴史は繰り返されると言うべきか。新たなサイクルの始まりである。

立教大学は、私が着任した1996年には5学部であったものが、今では10学部になり、海外に留学する学生数、海外から立教に来る留学生の数も驚くほど増えている。英語で行われる授業も増加の一途をたどっており、いわゆるキャンパスの国際化には目を見張るばかりである。今後この傾向は続くであろうし、それに伴うキャンパスの多言語化も進むことになろう。日本は内発的な動機付けから何かが変わるというよりも、外発的な理由によって変わることが多い。今起こっているキャンパスの国際化が、状況の変化を

引き起こし、それが引き金となり、変わらざるを得ないという理由から立教がグローバルな大学に更に変わってゆくことを期待したい。そのために、英語教育の新たな視点からの充実、日本語教育の拡充、英語による授業の増加、海外の大学との交流の拡大、職員や学務事務の多言語化が必須となろう。立教というアイデンティティをしっかりと持ちながら、変わるべきことは大胆に変える柔軟性と適応性を持ち、「地の塩」としてさらに150年は頑張っていってほしいものである。

とりかい しんいちろう